特定非営利活動法人三鷹ネットワーク大学推進機構

「民学産公」協働研究事業　成果報告書

アート・コミュニケーション事業の社会的意義についての一考察

－対話型鑑賞ワークショップの実践を通じて－

中嶋厚樹

目次

１．概要　・・・Ｐ１

２．研究の目的　・・・Ｐ１

３．申請団体プロフィール　・・・Ｐ２

４．協働研究の期間　・・・Ｐ２

５．研究の背景　・・・Ｐ３

６．研究方法　・・・Ｐ４

７．結果と考察　・・・Ｐ８

８．結語　・・・Ｐ２２

９．今後の計画　・・・Ｐ２３

１．概要

東京都美術館は、2012 年リニューアルに際し、アート・コミュニケーション事業の一環として、東京藝術大学と連携し、「とびらプロジェクト」を立ち上げ、美術館を拠点にアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトとして行なっている。東京都美術館、東京藝術大学が連携し、広く一般から集まった市民とともにつくられる事業は多岐に渡るが、これらの活動は近年、主体や特性は地域ごと様々に変えながらも日本各地へと伝播し、それぞれのアート・コミュニケーション事業が展開されている。
三鷹市でも市民が主体となって、アートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインができないか、アート・コミュニケーション事業の中でも特にこの点に着目し、まちづくりに活かせるのではないかと考え、その第一歩として、対話を通したアート鑑賞の場を、三鷹市民を中心とした一般市民に提供し、その生の声を集めることを実践することにした。具体的には東京都美術館で開催された特別展「ゴッホ展――響きあう魂 ヘレーネとフィンセント」にて、公募により集まった 15 名の参加者とワークショップを行ない、事前、事後のアンケートを中心にその声をまとめている。

２．研究の目的

ワークショップの実践を通じて参加者にアンケートを実施し、対話を通したアート鑑賞の需要、市民の関心や興味を研究期間内にアンケート調査の分析から明らかにし、まちづくりとしてのアート・コミュニケーション事業の可能性を示すことを目的とする。
アートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインは、多世代交流という点で、これからますます進む少子高齢化社会に有効な、どの世代も参加可能で、広く活用できる事業であり、将来的に大きな可能性があることを示したい。

３．申請団体プロフィール

中嶋厚樹（なかしまあつき）
株式会社スタジオジブリ　学芸員
三鷹まちづくり総合研究所まちづくり研究員　第１期
東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」第８期
文化庁ミュージアムエデュケーション研修　修了　第１０期
三鷹市市民参加でまちづくり協議会員

※「民学産公」協働研究事業には、まちづくり研究員枠に個人として応募した。

ワークショップの実施にあたり、とびらプロジェクト関係者各位、そしてとびらプロジェクトで活動しているアート・コミュニケータ１３名に協力していただいた。

卯野右子	照沼晃子	松本知珠
大石麗奈	梨本麻由美	牟田真弓
尾駒京子	野口真弓	和田奈々子
鹿子木孝子	平本正史	
柴田光規	堀内裕子	（敬称略　あいうえお順）

４．協働研究の期間
２０２１年6月３０日～２０２２年2月5日

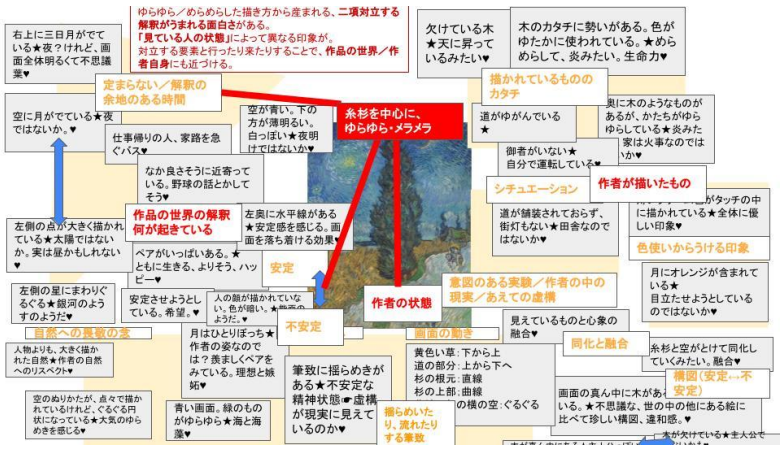
５．研究の背景

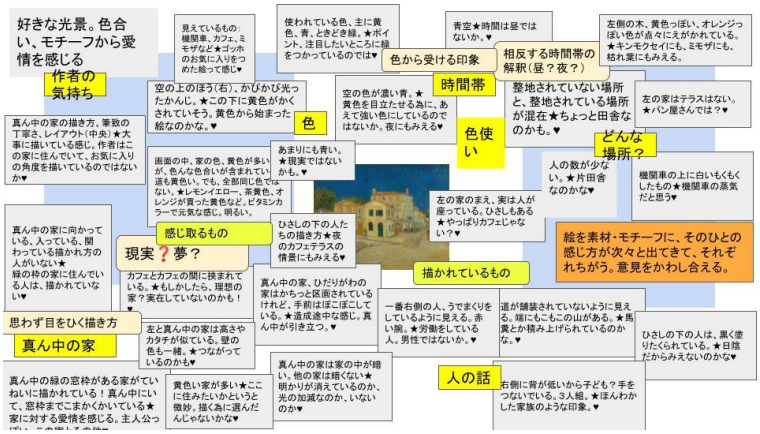
アメリカ、ニューヨーク近代美術館で教育部長を務めたフィリップ・ヤノウィンらによって開発された鑑賞プログラムとして知られる対話を通したアート鑑賞は、VTS（Visual Thinking Strategies：ヴィジュアルシンキングストラテジーズ）と呼ばれ、その効果は「観察力」「批判的思考力」「コミュニケーション力」といったこれからの時代を生きる上で必要な力を養う鑑賞方法として広まっている。三鷹市でもアートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインが実践され、まちづくりとして活用していけるようなきっかけとなればと考えたことが研究の背景である。
今回のワークショップは、参加者にアート・コミュニケーション事業の理解の第一歩として、アート・コミュニケータとの対話を楽しみ、体感してもらう機会としたい。
本協働研究事業は、特定非営利活動法人三鷹ネットワーク大学推進機構定款第４条に定める特定非営利活動のうち、（４）学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動に、関連する。

6．研究方法

とびらプロジェクトの協力を得て、2021 年 11 月 21 日、東京都美術館で開催された特別展「ゴッホ展――響きあう魂 ヘレーネとフィンセント」にて、鑑賞ワークショップ「アートを対話で楽しもう！」を実施した。
コロナ禍での実施のため、東京都美術館における新型コロナウィルス感染症予防対策を遵守し、事前に公募し、抽選で選ばれた 15 名に参加いただいた。

【事前準備】
7 月より、とびらプロジェクトで活動しているアート・コミュニケータに協力を呼びかけ、13 名にボランタリーで協力いただいた。
VTS の事前準備として、展覧会での事前観覧をはじめ、作家・作品研究を実施した。
参加したアート・コミュニケータの中には自ら呼びかけ、とびらプロジェクト内の活動としてアート・コミュニケータ同士で作品研究する機会をつくる活動をしたりした他、当日の場づくりに向けても、グループごとに主体的に話し合いが行なわれた。





（参考：アート・コミュニケータの活動で実施された作品研究の一部）

【募集告知】
10 月より参加者の募集を開始。三鷹ネットワーク大学ホームページ、メールマガジン、フェイスブックでの告知の他、チラシを作成し、三鷹駅などに配架された。

（参考：チラシデザインもアート・コミュニケータに作成していただいた。）

10 月 31 日〆切までに、応募総数 91 名　当選者 15 名　当選倍率 6.1 倍
三鷹市民の割合は約６０％となった。

多世代交流をテーマにしていることもあり、
２０代･３０代　５名　４０代･５０代　５名　６０代以上　５名　計 15 名を当選とした。

コロナ禍での募集告知となったが、感染者数がだいぶ落ち着いていたこともあり、91 名と想像以上にたくさんの方に関心を持ってもらうことができた。

【ワークショップ当日】

ワークショップ概要の概要は以下のとおり。

「アートを対話で楽しもう！」
◆日時　２０２１年１１月２１日　日曜日　１３時～１６時
◆会場　東京都美術館　アートスタディルーム
◆参加者　１５名
　※参加者は５名×３グループに分かれ、各グループにはアート・コミュニケータ３名がファシリテーターとして加わった。

　A グループ：20～30 代　2 名　40～50 代　1 名　60 代以上　2 名
　B グループ：20～30 代　1 名　40～50 代　2 名　60 代以上　2 名
　C グループ：20～30 代　2 名　40～50 代　2 名　60 代以上　1 名

◆内容
　・アートカードを使った自己紹介（アイスブレイク）
　・アート・コミュニケータと対話によるアート鑑賞
　　⇒新型コロナウィルス感染症対策として、企画展展示室内での対話を通したアート鑑賞は避け、東京都美術館アートスタディルームでアートポスターを使用した鑑賞を実施した。
　・作品との対話　あなたの誰かに伝えたい作品を見つけにいこう
　　⇒こちらも感染症対策のため、展示室内は各自鑑賞とし、アートスタディルームにて共有する時間を持つようにした。

【アートカードを使ったアイスブレイク】

【ポスターを使った VTS】

【展覧会鑑賞後の対話の場】

７．結果と考察

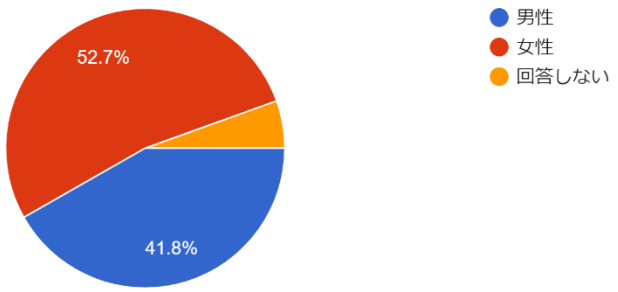
【応募者　事前アンケート集計】

応募時に、属性、応募動機などのアンケートを実施した。

応募総数　91 件　回収率 100%

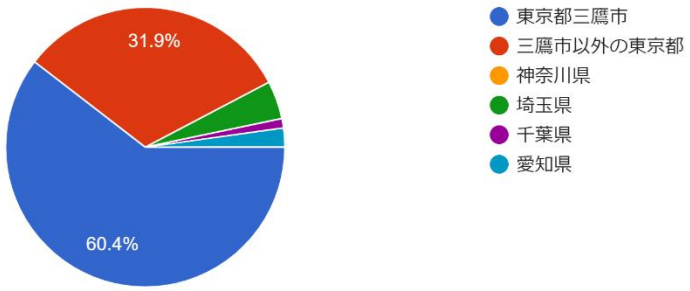
性別

91 件の回答



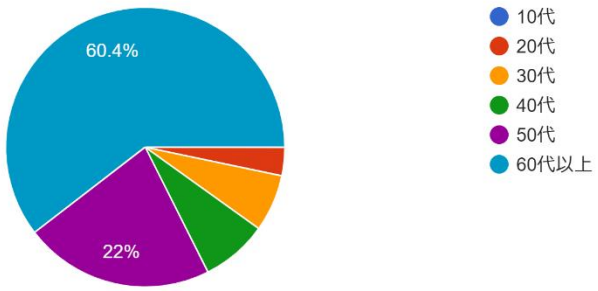
居住地

91 件の回答

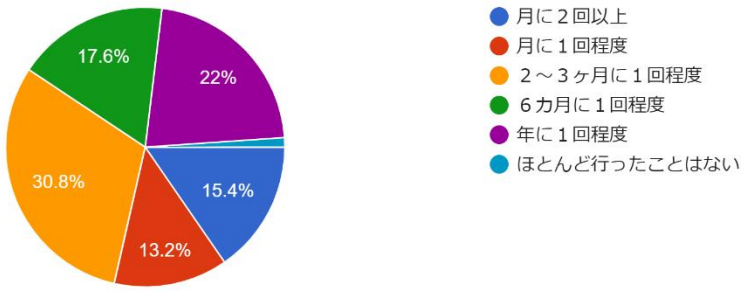


年代

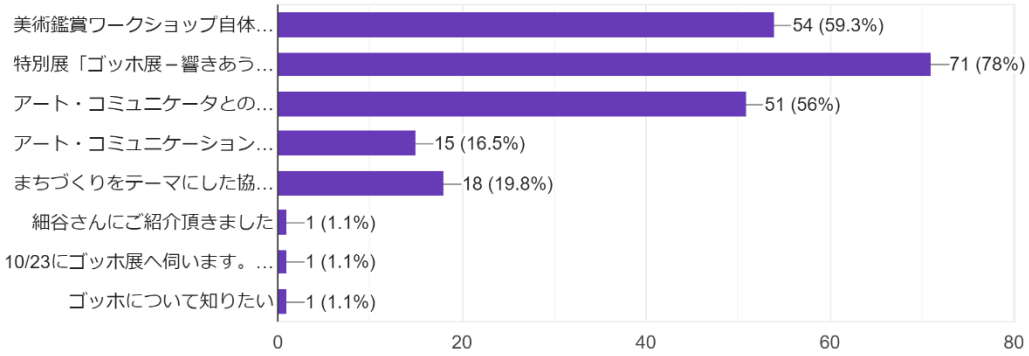
91 件の回答



美術館にどれくらいの頻度でいきますか？
91 件の回答



応募動機を教えてください（複数回答可）
91 件の回答



応募動機の選択肢は下記のとおり。

① 美術鑑賞ワークショップ自体に興味がある

② 特別展「ゴッホ展――響きあう魂 ヘレーネとフィンセント」の鑑賞ができる

③ アート・コミュニケータとの対話による鑑賞に興味がある

④ アート・コミュニケーション事業に関心がある

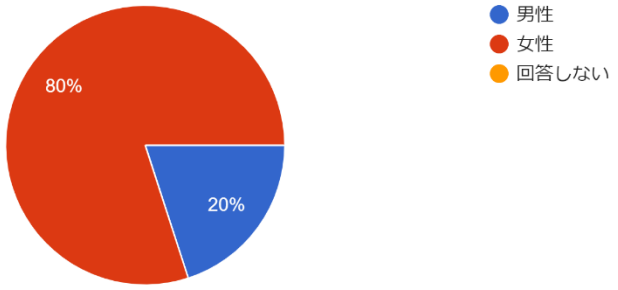
⑤ まちづくりをテーマにした協働研究事業に関心がある

【参加者　事前アンケート集計】

応募時アンケート集計のうち、当選となった 15 名について抜粋したもの。

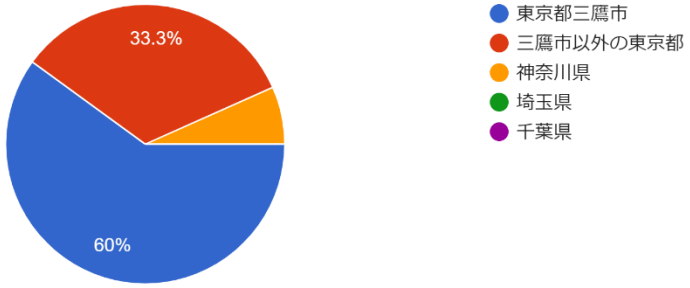
性別

15 件の回答



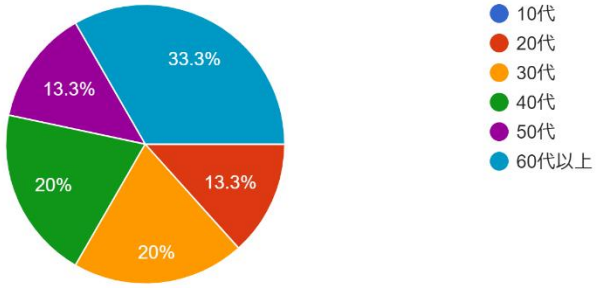
居住地

15 件の回答

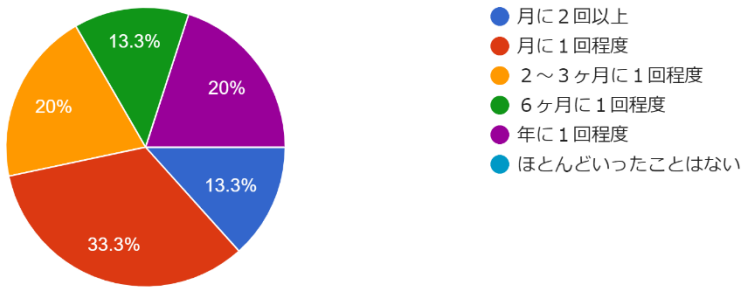


年代

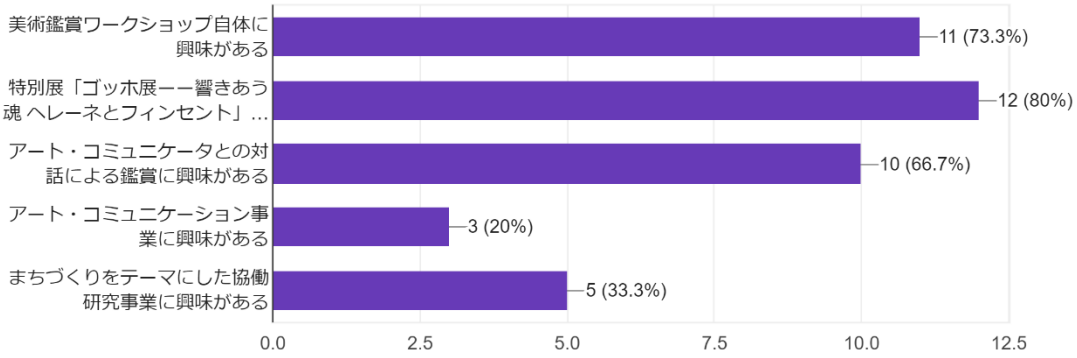
15 件の回答



美術館にどれくらいの頻度でいきますか？
15 件の回答



応募の動機を教えてください
15 件の回答

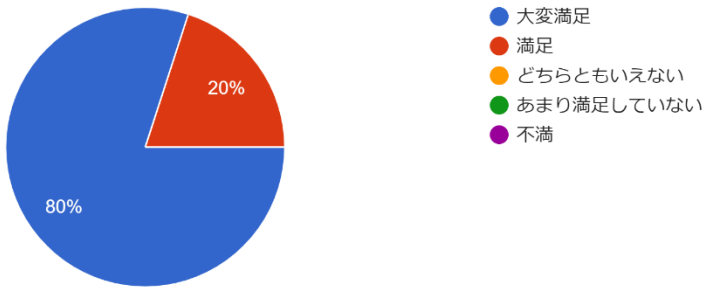


・募集告知が三鷹ネットワーク大学に協力いただいたこともあり、応募者、実際の参加者ともに、約 60%が三鷹市民。
・年代では応募者の 60%が 60 代以上と偏りがあった。
・美術館に行く頻度を見る限りは、普段から美術館によく行く人に限らず、多様な方に興味をもってもらえた。
・応募動機は複数回答可に対して、ゴッホ展が鑑賞できるという理由が約８割ともっとも多く、アート・コミュニケーション事業に興味があるという応募者、参加者は約２割と乏しかった。そもそもアート・コミュニケーション事業って何？というわからない方も含めてアート・コミュニケーション事業への関心は、ワークショップ実施以前は低かった。

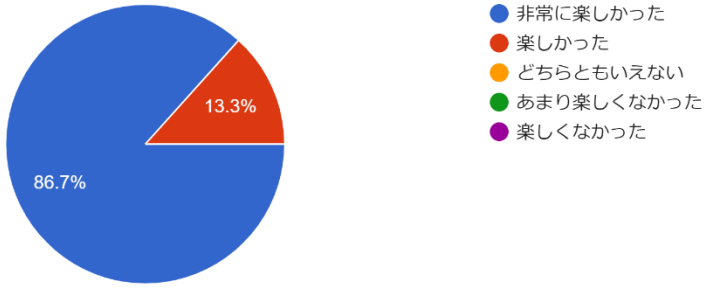
【参加者　ワークショップ終了後アンケートのまとめ】

参加者には実施日当日、ワークショップ終了後に書面にてアンケートを実施した。
参加者数 15 名　アンケート回収 15 名　回収率 100%

「アートを対話で楽しもう！」にご参加されていかがでしたか？（満足度）
15 件の回答



対話を通して作品を鑑賞することはあなたにとってどのような体験でしたか？
15 件の回答

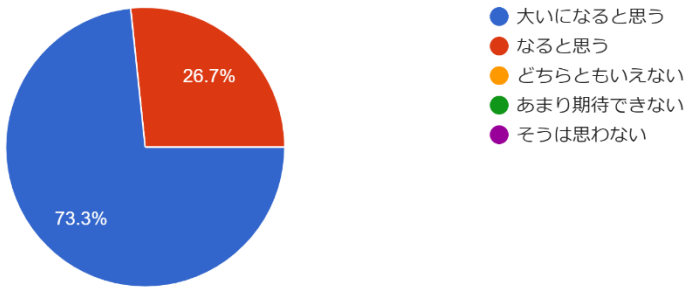


【参加者アンケートより：対話を通して作品を鑑賞することで気づいたこと、感じたこと】

・気づかなかったアイディアがアハ体験となり楽しかった。感想を言って皆さんがうなずいてくれるのが嬉しかった。
・人それぞれ見方も感じ方も違っていて、意見を聞いてから実物を鑑賞するとまた自分の感じ方も変化することがわかった。
・日頃家族以外と絵画について話すことがないので面白かった。人によって着眼点が違うことがわかった。

・他の人の意見を聞いて、新しい見方が見つかったり、自分の見方も進んだりした。
・作品を見る前に対話をする機会が新しい発見だった。作品タイトルを見る前にどういう作品かを話すと興味や想像がふくらむ楽しさを知れた。
・いろんな視点から作品を鑑賞することができた。対話を通して自身の感覚も研ぎ澄まされた感じがする。作品に対する愛着も深まった。
・自分とは違う感性の方のいろんな意見を聞けたことで新しい目線でみることができた。
・基本的に美術館賞はひとりでいくことが多かったので、他人の感想を聞いて気づくという経験が新鮮だった。
・作品を鑑賞することで、様々な感じ方、思いがあることを知った。鑑賞を通して感じていることを集中して話していくことが出来た。
・自分ひとりで見ていると気づかないことをいろんな方の目を通して新しい気づきがもたらされ、それをもって展示をみたことが自分にとって宝物になった。
・皆さんの意見がどんどん出て来て対話は面白かった。一人では流してしまうところに目がいき、キャプション以上に想像がふくらんだ。
・視点、経験が異なるので、見方に幅ができた。そして、いただいた視点をもって実物をみることで、自分だけでは得られないパワーを絵から受けられた。疑問も持てたので深く絵をみることができた。
・普段美術館に行くときは、一つの絵について時間をかけて話しあう機会がないので、すごく貴重な体験ができた。自分が思ってもいなかった意見があり、あらためてアートには正解はないのだと思った。
・思ったことを発言できること、共感したり、別の角度からの発言を聞いて視野が広がった。

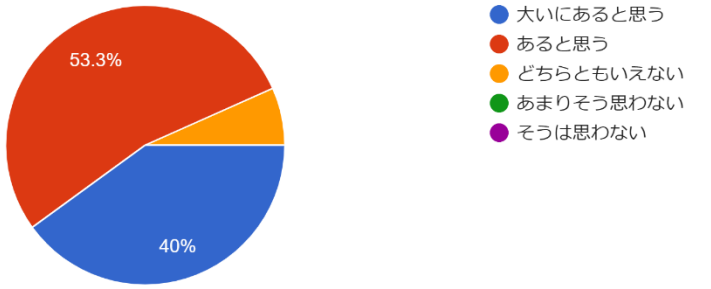
アート鑑賞は対話の場として、様々な世代が交流するきっかけになると思いますか？
15 件の回答



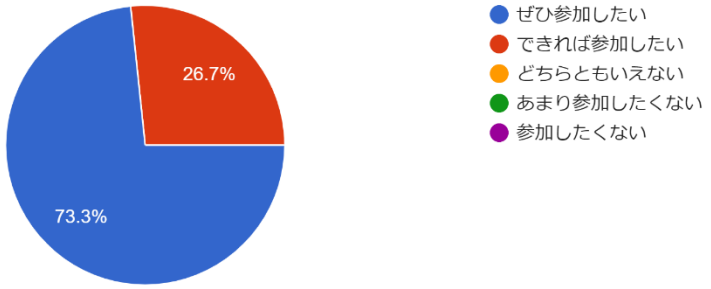
【参加者アンケートより：アート鑑賞での世代交流について気づいたこと、感じたこと】

・アートには正解がなく、年代は関係ないと思った。
・ものの見え方が世代で変わるとは思わないが、感性が違う人の意見を聞くことが楽しい。
・できるだけ年代、性別、職業等が違う人をシャッフルするとなお良いと思う。
・同じテーマで幅広い世代と話せることは大変良かった。
・様々な年代の方と対等な関係で、共通のテーマで自由に話をする機会が貴重だった。
・アートは対話を広げ、交流を深めるための最適な素材だった。
・感じたことを自由に言える場で、年代も関係なく、感じたことを素直に言えた。
・世代によってバックボーンとなる知識や視点が異なるので、自分では聞けない意見を聞くことが出来た。
・異なる世代の人たちと気楽に話したり、聞いたりする機会となった。
・人見知りなので最初はどうしようかと思ったが、誰かの話に応える形で少しずつ打ち解けられた気がする。
・フラットに互いをリスペクトして気づいたことをシェアできて、話が弾んだ。
・アートには正解がないので、意見が言い易かった。
・その人がどんな立場であるかに関わりなく、ひとりの人間として、感じたことを交流できるのはここしかない気がした。

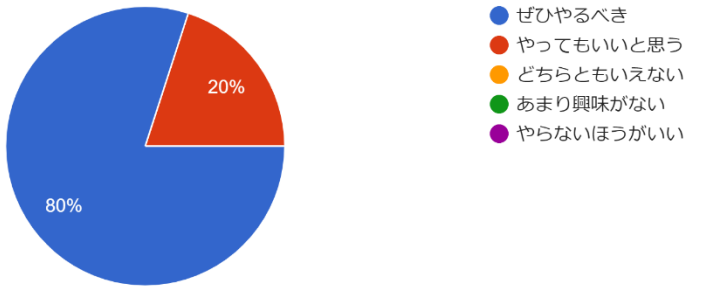
本日のプログラムを経て、ご自身のアート鑑賞に変化があると感じますか？
15 件の回答



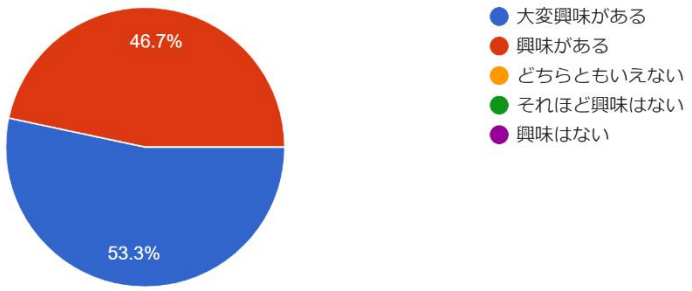
今後三鷹市で対話を通したアート鑑賞の機会があれば参加したいと思いますか？
15 件の回答



今後三鷹市でアート・コミュニケーションをまちづくりに活用していくような取組みについて
15 件の回答



アート・コミュニケータに興味はありますか？
15 件の回答



【参加者アンケートより：アート・コミュニケータとの交流で印象に残っていること】

・フランクに話を引き出してくれ、絵を見る楽しみに触れさせてもらえた。
・皆さんとても親しみやすい方で楽しめた。
・自由な対話を優しくサポートしてくれた。参加者の気づき、意見を受け止め、深め、対話につなげる役割は想像以上に難しい作業だと思う。
・参加者一人ひとりが話しやすいように導いてくれるところと、一緒に楽しんでいるところが印象的だった。
・グループの一人ひとりが話しやすいように気を遣ってくれたので、優しい気持ちで話をすることができた。
・最初は話しづらいと思っていたが、いつも寄り添ってくれて、その姿に感動した。
・貴重な体験をありがとうと言いたい。
・アート・コミュニケータが全てを受け止めてくれたので、安心して話をすることができた。
・アート・コミュニケータの方は話の拾い方、広げ方が上手だなと思った。
・やわらかく受け止め、まとめていただきよかったと思う。

【参考：当日アンケート用紙】

本日は「アートを対話で楽しもう！」にご参加いただきありがとうございました。
アンケートにご協力をお願いいたします。**（裏面まで全７問）**

Ｑ１：「アートを対話で楽しもう！」に参加されていかがでしたか？ □大変満足　□満足　□どちらともいえない　□あまり満足していない　□不満
Ｑ２：対話を通して作品を鑑賞することは、あなたにとってどのような体験でしたか？ □非常に楽しかった　□楽しかった　□どちらでもない □あまり楽しくなかった　□楽しくなかった ※その理由を含め、気づいたこと、感じたこと自由にお書きください
Ｑ３：本日は様々な年代の方にご参加いただきました。アート鑑賞は対話の場として、様々な世代が交流するきっかけになると思いますか？ □大いになると思う　□なると思う　□どちらともいえない □あまり期待できない　□そうは思わない ※その理由を含め、気づいたこと、感じたこと自由にお書きください

Q４：本日のプログラムを経て、ご自身のアート鑑賞に変化があると感じますか？

□大いにあると思う　□あると思う　□どちらともいえない
□あまりそう思わない　□そうは思わない

Q５：今後三鷹市で対話を通したアート鑑賞の機会があれば参加したいと思いますか？

□ぜひ参加したい　□できれば参加したい　□どちらともいえない
□あまり参加はしたくない　□参加したくない

Q６：今後三鷹市でアート・コミュニケーションをまちづくりに活用していくような取組みについて率直にどう思いますか？

□ぜひやるべき　□やっても良いと思う　□どちらともいえない
□あまり興味がない　□やらないほうがいい

Q７：アート・コミュニケータは、本日のようにアートを介して作品と人、人と人、人と場所をつなぐ活動をしています。アート・コミュニケータについて、興味はありますか？

□大変興味がある　□興味がある　□どちらともいえない
□それほど興味はない　□興味はない

※本日のアート・コミュニケータとの交流を通して、印象に残っていることがあれば自由にお書きください

ありがとうございました！

【考察：ワークショップを実施して】
・ワークショップの満足度
様々な世代の、必ずしも日常的に美術館へ行く方ではない参加者ではあるが、概ね対話を通したアート鑑賞ワークショップ自体は、満足度高く実施することができた。
対話を通したアート鑑賞についても、86.7%が非常に楽しかったと回答し、ワークショップ全体の満足度を押し上げる結果となった。

・アート・コミュニケーション事業への興味関心
アートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインの第一歩として、多くの方にアート・コミュニケーション事業の一端に触れ、関心をもっていただくきっかけにはなっただろう。特に、事前にアート・コミュニケーション事業に関心があると答えた方は約２割とほとんどの方が関心をもっていなかった中で、今後三鷹市でアート・コミュニケーションをまちづくりに活用していくような取組みについて、“ぜひやるべき”と回答する方が 80%と非常に高い関心を示してもらえたほか、今後三鷹市で対話を通したアート鑑賞の機会があれば“ぜひ参加したい”が 73.3%と非常に高い関心をもってもらえた。

・多世代交流について
アート鑑賞が様々な世代が交流するきっかけになるかという問いに 73.3%が大いになると思うと回答した他、個別のコメントからも、対等やフラットという言葉が散見され、多世代交流のきっかけとしてのアート・コミュニケーションの可能性を感じてもらえたのではないかと考えている。

・鑑賞ワークショップとして
本日のプログラムを経て、ご自身のアート鑑賞に変化があると思いますか？という問いに対しては、あると思うが 53.3%と、大いにあると思う 40%を上回った。
もともと美術館に行く頻度も様々な中で、客観的に自分自身を振り返り、楽しかった、満足したという勢いでの回答ではなく、リアルな声を聞くことができたと思っている。
新しい鑑賞体験の提供という意味でも、アート作品との向き合い方に少しでも変化があったのであれば、対話をファシリテーターとしてリードしたアート・コミュニケータ冥利につきる。

最後に、後日、ワークショップ当日の各参加者の鑑賞の様子をアート・コミュニケータからアンケート調査およびオンラインでのふりかえりミーティングを実施し、伺った。
アート・コミュニケータ各自にとっても、熱狂してくれている参加者の様子を感じる機会になり、参加者にとって美術館での新たな鑑賞体験となり、コミュニケーションの場になっていたことを、アート・コミュニケータそれぞれが場を作りながら感じた様子が伝わってきた。

【アート・コミュニケータによるふりかえりコメント】

・絵に近づいた動きもありつつ、皆さん前のめりで絵をよく観ようと集中しているのが分かりました。グループの中での会話の重なり、化学反応も起きていて、人の発言を聞いて一生懸命考えている様子も見て取れました。
個人的には「黄色い家」の前の空間に注目した発言で「ゴッホのこれまでの道のりが表現されていてこの黄色い家に導いているように感じる」という意見が印象的でした。現在子育て中の女性がいらしたのですが、将来子どもにも！と関心を持たれていました。

・ワークショップを終え、会場を退室する際の「三鷹でまた会いましょう。」という参加者の言葉。年代性別も異なるが、同じ三鷹市民であるという共通項があったからこそ、参加者はより深くゴッホ展に関する対話を楽しむことができたように思います。

・ゴッホ展から戻ってこられた参加者のみなさまの目がキラキラしていて、とてもいきいきと発言されていたが印象に残っています。本物の作品が持つ力を感じると同時に、事前にVTS をしたことで、じっくりと豊かな鑑賞をされたことが伝わってきました。
ふりかえりでは、VTS で他の方の意見を聞いたあとでご本人の目で作品をみたときに「自分の答え」を見出せたというお話が印象に残っています。自分の答えを発見できた喜び、感動が伝わってきて、わたしもとてもうれしかったです。

・ゴッホ展から戻られた時に開口一番に、興奮気味に”私は（絵を見て）何かを発見することはできないかもしれないけど、言葉では表現できないものをとても強く感じられました”と話してくださいました。VTS を通じて少しでもその方の中できっかけになったのだと思います。WS 実施後のアンケートでも、今後もぜひ参加したいと記入して頂いた方が多数いらしたことに感動致しました。

・チームで一体感を感じました。アンケートに人見知りだと書いてあった最初にあまり喋らなかった参加者さんが最後は立って身を乗り出して目を輝かせて楽しく過ごされていたので、とても嬉しかったです。

・観賞を経て「自分なりの答えが見つかった！」と嬉しそうに発表してくれたこと。その方は、アートを対話で楽しみ、実際に本物を味わってみることで、作品を自分の中に取り込むことができたのだなと感じた。

・「(様々な背景を持つ）参加者が対等な立場で対話をできた」「この場だからこういう話ができた」「アートは答えがないところがいい」など参加者が高揚しながら語っていました。

・展示室から戻った参加者から「タイトルを見て、糸杉が“夜“だとわかってしまった。作者がつけたタイトルなのかな？対話中のようにキャプションを見ない方が、豊かに楽しめたなぁと感じた。」という発言が。キャプションを見る、見ないは自由だけど、今回のように作品とじっくり向き合い、語り合う楽しさを感じてもらえたなら嬉しいと伝えた。作品に近づく一つの方法として、対話の魅力を感じてもらえたなら嬉しい。

・「黄色い家」の前景の広場のようなスペースについて、VTS 中に様々な意見が出たのですが、実際に展示会場で見た後の振り返りで、作者がどう考えていたかということはともかく、自分としての答え、自分の感じ方に気付けたことがうれしかったと言っていただけたことがとても印象的でした。

・大人はいろいろな知識があるので、正解などに捉われがちですが、自分の感じ方と向き合う楽しさはそれとはまた別の、鑑賞の醍醐味と思っているので、そのことを少しでも感じていただけたことはうれしかったです。
限られた時間で、楽しもうという姿勢が感じられる方ばかりで、また、事実は事実として受け止めながらも、そこを越えた言葉も聞かせていただくことが出来、大人の対話を感じました。ホンモノを見る前の VTS 時間に、よく見ることや、見て自分なりに考えること、想像をめぐらしてみるといったモードに入ることが出来た印象で、展示会場での鑑賞に当たり、いいスイッチとなったのではないかと感じています。
展示会場から戻っても話が続いている感じで、実際に見て改めて感じたことを話せたのも楽しかったです。それぞれおひとりで会場にでかけられましたが、そういう意味では、戻ってまたさっきのメンバーで話す、「仲間」のような感じもあったのではないかとも思います。

８．結語

はじめに、コロナ禍において、ワークショップ「アートを対話で楽しもう！」の実施させていただいた、東京都美術館、とびらプロジェクト関係者各位、実施に協力いただいたアート・コミュニケータ各位、感染症対策を遵守しご参加いただいた参加者の皆様、三鷹ネットワーク大学関係者各位、全ての方々に心から感謝申し上げる。

新型コロナウィルス感染症の流行拡大が少し収まっていた時期ではあったが、コロナ禍の中で、参加者も１５名と少人数での開催となり、アンケート調査の結果の数字としての説得力は小さいが、その分、参加者一人ひとりの言葉やアート・コミュニケータの言葉もできるだけ集め、紹介することを目指し、報告書にまとめた。

このようなご時世ではあったが、やれることはやらせていただけたと思っている。

東京都美術館×東京藝術大学「とびらプロジェクト」ホームページには、“私たちの目指すこと”として、『「成熟した社会」と言われる現代の日本において、今後取り組まなくてはならない社会的な課題は、多様性の尊重とそのネットワーク化の２つであると考えます。一つは人々の価値観や文化背景の違いなどを尊重することであり、二つ目は個々人の生き方を孤立させず、社会の中で関係づけていくことと捉えています。多様な人々の多様な価値観を結びつけていけるアート・コミュニケータが社会の中で機能することにより、誰もが誰もを包摂できるしなやかで柔軟な社会基盤の構築を目指していきます。』と掲載されている。

そして、このようなとびらプロジェクトの取組みは共感を呼び、主体や特性は少しずつ変化しながらも近年日本各地に広がってきている。

今回のワークショップで参加者に対して提供できたものは、アート・コミュニケーション事業の極々一端であるが、アート作品を、対話を通じて鑑賞することの最初の一歩となる体験と、多世代交流を通して、アートを介してコミュニティを育むその社会的意義や、まちづくりとしてのアート・コミュニケーションの可能性について、参加者及びこのレポートを見ていただく方に少しでも感じてもらえていたら幸いである。

最後に、アート・コミュニケーションとまちづくりについて、これからの社会課題の視点から記載したい。

近い将来の社会課題として、少子高齢化に伴う超高齢化社会があるが、『三鷹市まち・ひと・しごと創生「人口ビジョン」「総合戦略」～第４次三鷹市基本計画（第２次改訂）より抜粋～』によると三鷹市でも、生産年齢人口は 2023 年（125,088 人）をピークとして、それ以降は減少するものと見込まれているほか、平均寿命の延伸などにより一貫して高齢化が進み、老年人口の割合は 2019 年（21.8%）から 2049 年（31.2%）までに、10 ポイント近く上昇する見込みである。

また、近所づきあいの希薄化や核家族化が顕著な現代において「社会的孤立」も深刻な社会課題であり、高齢者社会ではますます深刻なものになってくることが懸念される。

今回のワークショップは、アート・コミュニケーション事業の一部を体感、体験してもらう機会の提供をつくるとともに、多世代交流の機会でもあったが、あらためてアートを介して多世代が交流し、地域がつながるような場をつくることは、こういった社会課題に対しても有効ではないだろうか。
「孤立」という病を地域のつながりで治す方法として、「社会的処方」も注目されているが、三鷹市にもまちづくりとして、アートを介してコミュニティを育むソーシャルデザインとしてのアート・コミュニケーション事業が実現し、こういった社会課題に対しての社会的処方となるような取り組みとなることを望みたい。

９．今後の計画

今回のワークショップは新型コロナウィルス感染症の感染拡大が少し落ち着いていた時期での開催に結果的になったが、コロナ禍であることに間違いなく、そんな中でも定員の６倍以上となる大変多くの方にご応募いただいた。
今後も関心をもっていただいたのに今回ご参加いただけなかった方々をはじめ、アート・コミュニケーション事業を知り、興味をもってもらえるようなワークショップの開催を継続的に行なっていくことができたらと考えている。